

心理療法における応答の多層性

原 谷 直 樹

1 序

心理療法の研究において「応答」という用語は、「セラピストの発言」という意味でしばしば用いられる。そして、その「発言」が分類整理される研究が多い（例えば、遠藤, 1998；吉良ら, 1992）。しかし、「応答」はセラピストのみに留まらず、クライアントの反応についても用いられる（原谷, 2006a；原谷2006b）。クライアントとセラピストの反応はそれぞれ相互に作用しあうものである（Menninger, 1958／小此木・岩崎, 1969, p109）。ここでは、心理療法の展開においてクライアントとセラピストの間に生じているさまざまな反応のプロセスの集合を「応答」と定義する。

精神分析学において応答は「セラピストの発言」という意味とは異なった意味で言及されてきた。応答の概念を最初に導入したのは、Theodore Reikである（原谷, 2008）。Reik (1948) は「応答」をセラピストの内的な反応と考えた。

「ここでクライアントのコミュニケーション、言葉、ジェスチャー、沈黙、などに対する分析家の反応 (reaction) について、応答 (response) という用語を導入したい。私は分析家の持つクライアントについてのいろいろな印象などの反応の集合を応答と呼ぶことにする。分析的な応答は、従って、クライアントの発話、行動、外見に対する感情的で知的な応えであり、分析家自身の内的な声についての気づきを含んでいる。解説や説明の形で分析家が述べるすべての解釈

を相当程度決定づけるのはこの応答である。言わば応答は分析家がクライアントについて知覚し感じ感覚する内的な経験である。これまでの章で説明してきたことから明らかなように、こうした応答の主要な部分は本質的に無意識的であり、ほんの僅かな部分しか意識化されない。応答は従って、こころの動きが根づく暗黒の土壌である。この地下に深く隠れた根から、地上にわれわれの知的で論理的問題理解が生じてくるのである。この隠れた根から、精神分析的な知恵の大樹が伸びてくるのである。(Reik, 1948, p 270, 日本語訳は筆者)」

この記載からわかるようにReik (1948) は、セラピストの発言ではなく、クライアントについてのセラピストの内的な気づきや感情などの反応を応答と概念化している。

このように、「応答」という用語は、心理療法の展開にとって非常に重要な概念のひとつとして、さまざまな学術的臨床の場面で異なった意味で用いられている。ところが、セラピストとクライアントの間にどのような応答が考えられるのかを系統的に考えた研究は、筆者の知る限りまだみられない。そこで、本論考の目的は、セラピストとクライアントの関係性においてどのような応答が考えられるのかを明らかにすることである。このことによって、「応答」についての研究者や臨床家同士の対話がよりスムーズになると考えられる。また、クライアントとセラピスト双方の反応のプロセスを系統的に理解することにもつながるだろう。

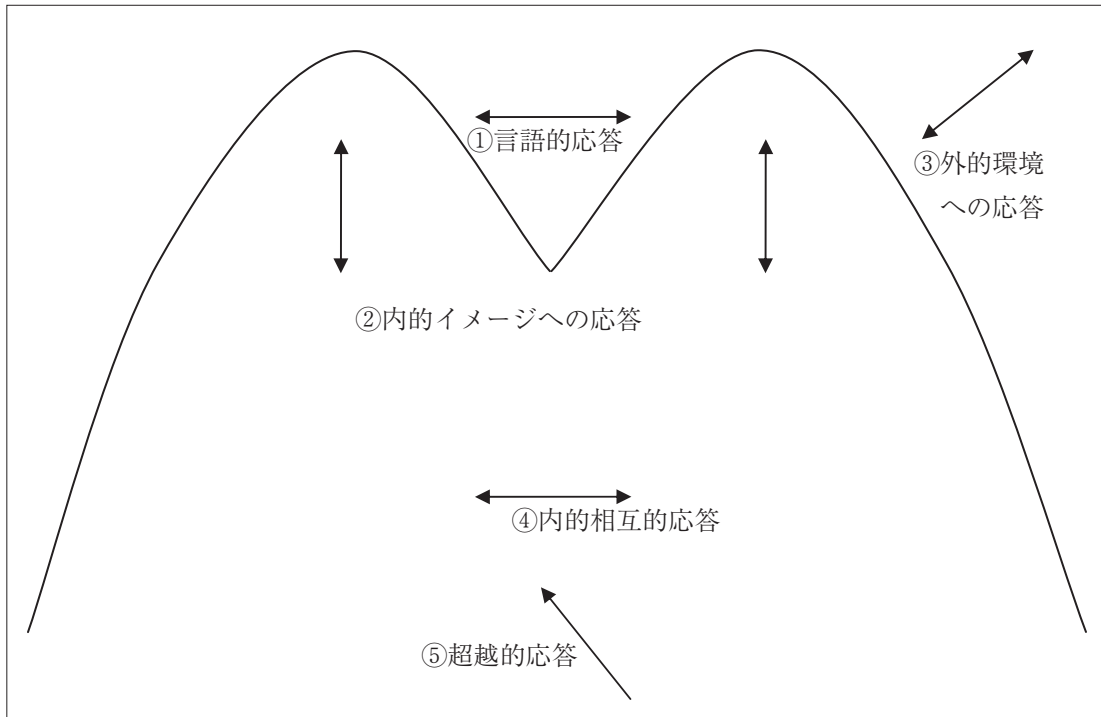


図1 人と人の応答の層構造

II. 人と人の応答の層構造

心理療法場面においては、クライアントにもセラピストにもさまざまな応答のプロセスが働いている。これまで言及されてきた応答以外にも考慮すべきいくつかの応答があるのではないだろうか。そうしたいくつかの重要な応答の要素の関係を図にして考えたのが図1である。図の左の山がセラピスト、右側の山がクライアントをあらわしている。Reikの応答論はセラピストの応答のみであったが、ここではクライアント自身の応答も含め、かなり多層的に概念化した。

(1) 言語的応答

これは応答のうち言語化された狭義の応答である。狭義の応答とはセラピストとクライアントとの間でやりとりとしてなされる言語的な応

答であり、これまでの研究としては遠藤裕乃(1998)や吉良ら(1992)などが挙げられる。

(2) 内的なイメージへの応答

内的なイメージに対する応答である(原谷, 2006a; 原谷, 2006b)。ゲシュタルト療法においては、応答はいわゆるやりとりという意味の言語的応答だけではなく、内的なイメージに対する応答である(原谷, 2006a, 図2)。

原谷(2006a)はこの点を心理劇とゲシュタルト療法の相違から明らかにした。心理劇ではメンバーがクライアントの話の登場人物を演じてみるのに対し、ゲシュタルト療法ではクライアントがすべての自身の話の登場人物になってみる。したがって、クライアントの応答は、セラピストやメンバーへの応答ということのみならず、自分自身への応答となるのである。

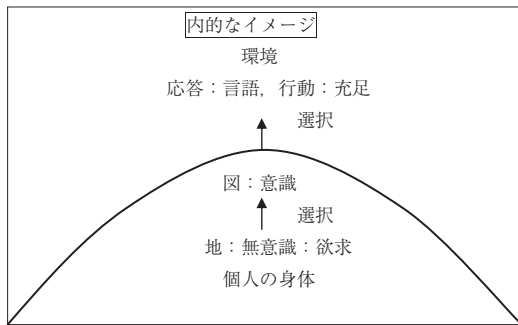


図2 環境における個人の応答の過程（原谷，2006a）

（3）外的環境への応答

個人と自然や地域などの外的な環境との関係についての応答である。セラピーをいつどこで誰が行うかという外面的な治療構造（小此木，1990）、そして時代性や地域性に呼応して展開する要因である。

（4）内的相互的な応答

システム論を基にした（狩野，2001）セラピストとクライアントの無意識的な交流がこれに当てはまる。この交流は無意識的で内的な相互作用である。北山（2006）はセラピスト側のようなこうした応答のプロセスを起承転結で論述している。①起としての共感：クライアントの問題をに対し察し共感的に聴く。②承としての治療者の同一化、逆転移、行動化：治療者はクライアントの反復する台本の相手役を押し付けられる。③転としての「傷ついた治療者」の自覚：治療者が悲劇の台本を演じてしまっていることを自覚する。④結としての理解の深まり：セラピスト自身が患者の悲劇の台本を演じている自覚とそれについて考えることを通して、患者の反復する心の台本に対する理解が深まる。

こうした応答では、主語がクライアントであるのかカウンセラーであるのかどちらの主語なのか分からなくなる。典型的に起こるのは

表情認知であると筆者は考える。あるクライアントの表情を「悲しい表情」とはセラピストの同一化があってはじめて読み取れる。ところが、こうした表情認知も読み取る側と読み取られる側で異なる場合がある。例えば、読み取られる側は「嬉しい」のに読み取る側は「悲しい」とか「眠い」などと読み取る場合がある。ところで、たとえ読み取る側も、嬉しくて、読み取られる側も嬉しかったとする場合、読み取った「嬉しい」は読み取られる側の「嬉しい」なのかそれとも、同一化している読み取る側の「嬉しい」であるのか、実際はわからない。

このどちらの主語かわからないような主体の領域を間主観性と言う。鯨岡（2005）は「他者の主観（心）の中の動きをこの『私』の主観（心）において掴むことだという意味で、『間主観的に把握されるもの』とまとめることができます。（p16）」と述べている。他人の表情からわれわれが情緒を読み取る時、読みとる側は「間主観的に把握されるもの」を読み取っているのだろう。

（5）超越的応答

クライアントやセラピストの関係性をも超えた何かにアレンジされるような応答である。人間を超越した存在から私たちに与えられる受動的な応答である。この受動性は個としての能動性を身につけた上での大なる受動性であり、自然とともにあって生かされていることに対する畏敬の念などがその例である（池田，2005）。

応の字は古代の人間が、重要な事柄を決める時に神意を鷹で占ったことに由来し、「答」の字は古くは「合」の字であり祝詞を収める器に蓋をしている形である（白川，2005）。そもそも、応答の文字に人間を超越した存在とのやりとりの意味が内包されているという事実は興味深い。

臨床的には、たとえば「どうしてここでこの

人に会ったのか」というような、必然めいた不思議なめぐりあわせが確かにある。また、なぜここでこの言葉が沸いてきたのかということについても同様である。

山中（2006）はJungの同時性を、縁起律と日本語に訳し、こう定義する。「時空を抜いて意味を同じくする事象が、同時的に、とくにクロノス（時計で計られるような誰にも均等な科学的時間）のみならずカイロス（個人でおの異なる心的体験時間）を共にして、コンステレート（布置）されることを説明する原理である。（山中，2006，p230）」山中（2006）の言う縁起律は超越的応答に近い概念であると考えられる。

III. 考察

本論考の目的は、クライアントとセラピストの間にどのような応答があるのかを系統的に明らかにすることであった。①言語的応答②内的イメージへの応答③外的環境への応答④内的相互的応答⑤超越的応答の5つの応答の層が考えられた。こうした応答の多層性をふまえることによって、心理療法における関係を包括的に捉えることができるだろう。

クライアントが発言したことに対してどう応答するかということは、日々の臨床実践においては、即座的に行うものであろう。楽器の演奏やスポーツの実践と同様のものである。しかし、ひとつひとつの「応答」がセラピーのプロセス全体の中でどういった意味を持っているのかということをも明らかにするためには、今回示したような複数のレベルの応答について考えることが有効であると思われる。

たとえば、セラピストがあるクライアントに対して攻撃的な気持ちになる場合を考えてみよう。言語的な応答のレベルではいやに丁寧に接してみたり、思わず拒否的な発言を試みたりする

であろう（①言語的応答）。そのクライアントがセラピストにとってどのようなイメージであり、そのイメージにどのような感情を持っているのかということも心理療法の展開にとっては重要である（②内的なイメージへの応答）。また、いわゆる転移、逆転移の相互作用がどうなっているのかという面から内的相互的応答のプロセスを振り返る力もセラピストに求められる（④内的相互的応答）。どのような場面構成で面接をしているかということが、その攻撃的な気持ちにどのように影響しているのかも是非考えておかななくてはならないだろう（③外的環境への応答）。そして、以上の応答の布置の自然な流れに目を向けることも大切である（⑤超越的応答）。

このように、言語的応答に至るさまざまな反応の集合の多層的なプロセスに目を向けることで、心理療法におけるクライアントとセラピストの関係性を包括的で大局的な観点からみることができるようになるのである。村瀬（2003）は言う。「人は相手の心の深さに応じて自己を開示する、という。一見、非人間的に思われる行動をする親（引用者注：クライアント）のその深い淋しさ、怒りをどこまで身をそわせて汲み取れるか、われわれ援助者は、自分の器の質を常に問われているわけである。（p174）」今回提案したように、応答を多層的に捉えることで、「どこまで身をそわせて汲み取れるか」ということについて、セラピストがより深く柔軟で奥行きを持った考え方ができるようになると筆者は考える。

本論考は、心理療法のプロセスでクライアントとセラピストの間に生じているさまざまな反応のプロセスの集合を「応答」と定義し、その多層性を明らかにした。もちろん、今回は大まかで粗野なスケッチをしたものにすぎない。いささか話が図式的にすぎ、大げさになった感も否めない。概念的な検討や整理を緻密にしない

てはならないだろう。臨床経験との照合もより丁寧に行わなくてはならない。今後の課題にしながら、日々の臨床活動を続けていきたい。

引用文献

- 遠藤裕乃 (1998) 心理療法における治療者の陰性感情と言語的応答の構造に関する研究. 『心理臨床学研究』第16巻, 313-321.
- 原谷直樹 (2006a) 応答することの学び ―ゲシュタルト療法を受けた経験から― 人間性心理学研究 第24巻第2号, 35-45.
- 原谷直樹 (2006b) エンプティ・チェアを経験して ―内的なイメージへの応答― 現代のエスプリ 第467巻 231-243.
- 原谷直樹 (2008) テオドール・ライクの応答論 ―セラピスト自身の声に耳を傾けること― 日本人間性心理学会 プログラム・発表論文集162-163.
- 池田豊應 (2005) 超越と人間性: 序論. 『人間性心理学研究』第23巻第2号, 1-12.
- 狩野力八郎 (2001) 生命現象と物語: 心理療法とシステム論. 精神療法第27巻第1号, 38-44.
- 吉良安之、田村隆一、岩重七重、大石英史、村山正治 (1992) 体験過程レベルの変化に影響を及ぼすセラピストの応答: ロジャーズのグロリアとの面接の分析から 『人間性心理学研究』第10巻, 77-90.
- 北山 修 (2006) 日本語と精神療法: 特に「矛盾」の取り扱いを巡って. 精神神経学雑誌 第108巻第1号, 1270-1281.
- 鯨岡 峻 (2005) 『エピソード記述入門: 実践と質的研究のために』 東京大学出版会
- Menninger, K. (1958) *Theory of Psychoanalytic Technique*. Basic Books, New York. [小此木啓吾・岩崎徹也訳 (1969) 『精神分析技法論: 現代精神分析双書 2』 岩崎学術出版社]

- 村瀬嘉代子 (2003) 『統合的心理療法の考え方: 心理療法の基礎となるもの』 金剛出版
- 小此木啓吾 (1990) 治療構造論の展開とその背景. 『精神分析研究』第34巻第1号, 5-20.
- Reik, T. (1948) *Listening with the Third Ear: The Inner Experience of a Psychoanalyst*. Farrar, Straus and Giroux, New York.
- 白川 静 (2005) 『新訂: 字訓』 平凡社
- 山中康裕 (2006) 『心の宇宙③: 心理療法のコア』 京都大学学術出版会